エリー・テマン『産み出される母親：代理母の身体と妊娠する自己』、カリフォルニア大学出版、2010 年
(Teman, Elly, 2010, Birthing a mother: the surrogate body and the pregnant self, University of California Press: Berkeley, Los Angels, and London).

目次

プロローグ
序論
（第一部）
１章　代理する自己、身体化された他者
２章　身体地図
３章　身体地図を用いて
（第二部）
４章　依頼女性と母親への意志
５章　変異する身体
（第三部）
６章　分類の儀礼
７章　代理母の贈り物
（第四部）
８章　代理母の使命
９章　英雄的な冒険
結論

エリー・テマンによるイスラエルにおける商業的代理出産を扱った民族誌、『産み出される母：代理出産する身体と妊娠する自己』(*Birthing a Mother: The Surrogate Body and the Pregnant Self*)は、代理母および依頼者夫婦へのインタビューを中心としたフィールドワークの成果にもとづいた読み応えのある力作である。生殖医療研究は近年人類学の定番の研究テーマの一つとなった感があるが、代理出産についてのまとまった実証的研究はそれほど多くはない。この意味で、濃密な民族誌的記述を提示するテマンの著作は非常に貴重な文献であると言える。

イスラエルでは、商業的代理出産が明確に法によって合法的な行為として定められている世界でも数少ない国のひとつである。1996 年には、商業的代理出産が合法化され、政府による管理下での商業的代理出産がおこなわれてきた。テマンによれば、イスラエルでの速やかな代理出産の制度化を促した背景として、シオニズム的ナショナリズムがある（序章）。

イスラエルでは、ユダヤ人の人口を増やすことは国家的利益に直結するものとみなされている。女性は母親として子を産み育てることは、男性が兵役をとおして国家と民族の利益に奉仕するのと同様の行為とみなされる。そうしたなかで、女性が母となることへの願望は社会的に積極的肯定され、補助生殖医療も人口政策の一貫として推進されてきた。その一方で、補助生殖医療は、シオニズム的ナショナリズムにとって、国家＝政治的身体の

Published by Yuri Hibino

純粋性を損なう怖れをももたらすものとしてもとらえられてきた。ユダヤ人とは、ユダヤ人の母親から生まれた者であるという律法学者たちの見解もあり、代理出産をめぐる法制化の論議では、代理出産をめぐる法的空白によって、非ユダヤ人がユダヤ人カップルのために子を出産したり、あるいは、外国人がユダヤ人女性を代理母として雇ったりする可能性を排除する必要性が主張された。

こうした社会的文化的要因が素地となり、代理出産の迅速な制度化を促した。依頼者は異性同士の婚姻関係にあるカップルに限定され、代理母候補者は、政府によって任命された承認委員会の厳格な審査を受ける。イスラエルでは、既婚女性が夫以外の男性の子を身ごもることは不貞行為とみなされるために、代理母となる女性たちは出産経験のある独身者、いわゆるシングルマザーに限られる。代理候補者は適格と判断されると、依頼者夫婦と契約を結ぶ。代理出産契約を経て生まれた子は、生後依頼者の実子として扱われる。

契約から懐胎・出産にいたるまでの過程は、代理母にとっても、依頼者夫婦、とくに母親となろうとする女性(intended mother)にとっても特異な経験に充ちたプロセスである。テマンは、そうした代理出産に当事者としてかかわる女性の経験についての語りを、インタビューに加えて、サポート・グループの参与観察やインターネットの書き込みをつうじて湛然に収集し、分析している。なかでも興味深いのは、第一部の三つの章描きだされる代理母の代理出産にまつわる特異な身体経験と実践である。

テマンは、イスラエルの代理母は、自らが身ごもる子を「他人の子」として強く意識し、技術によって媒介された「他人の子」の懐胎と自然な過程としての「我が子」の懐胎を明確に区別しようとするという。この区別は、概念的ではなく身体的でもある。すでに出産経験のある女性にとって、受精卵移植にはじまる代理出産の過程は、かつての出産経験とははっきりと異なるものとして経験されるからである(第一章)。代理母にとって、代理懐胎とは、自らの身体の一部が「他人の子」の存在によってまた、親となろうとする他者のプロジェクトによって占拠する過程である。

こうした代理出産特有の経験にたいする対処戦略を、テマンは「身体地図」(body map)という言葉を用いて概念化している（第二章、第三章)。イスラエルの代理母は、一時的に自らの子宮を自己から切り離されたものとみなすことで対処する。子宮やその周辺部位で生じている変化に注意・関心を向けないよう努める。また、通常の妊婦のように振る舞うことなく、妊娠による生活上の変化を最低限に留めようとする。他者—すなわち依頼者夫婦、とくに母親となろうとする女性–によって自らの身体やその内にある胎児にそそがれるさまざまな欲望や関心は、プライバシーを脅かす可能性がある。これにたいして、代理母は、一定の譲歩をしながら身体的統合性を守るために、さまざまな仕方で境界を維持しようと試みる。

第二部では、子を得ようとする女性の視点から代理出産の経験が描かれる。代理母が、「妊婦」としてのアイデンティティを極小化しようとする一方、依頼女性は反対に、さまざま仕方で未来の母親としてのアイデンティティを醸成していく。多くの依頼女性は、代理母と頻繁にコンタクトをとったり、代理母

の診察に立ち会ったりして、代理母の妊娠から出産の過程に参与する。その結果、「わが子」を妊娠する他者の身体の同化が生じ、ある種の擬似妊娠体験をもつものもいる（第４章）。

ラゴネによれば、アメリカの代理出産において、当初は代理母と依頼者夫婦とのあいだに成立していた協同関係は、人工授精による伝統的代理母型から体外受精による代理懐胎型へと代理出産の主流の形態が移行する９０年代半ばで変質し、よりビジネス化する傾向が顕著になる。しかし、テマンによれば、もっぱら代理懐胎型しか行われないイスラエルでは、代理母と母親となろうとする女性との協同関係という性質が未だに濃厚である。それはときには、葛藤を生じさせるが、多くの場合、妊娠、出産の過程をつうじて、代理母と依頼女性のあいだに特異な絆が生じさせる（第５章）。

こうした代理母と依頼女性のあいだの特異な絆は、出産をつうじて転機を迎える。第三部では、そうした出産後の変化が描かれる。依頼女性は、あたかも自らが出産するかのように入院し、子が生まれ、代理母の手を離れた直後から、「ふつうの母」と同様に振る舞おうとする。この段階で、自分とは別の「生みの母」の存在は、母子関係の確立への潜在的な脅威という意味を帯びてくる。病院側は代理母と新生児および依頼女性を引き離そうと努め、依頼女性も代理母と一定の距離をとろうとする事が多い。（第６章）。

出産にともない、代理母と依頼女性のあいだには緊張や葛藤が生じ、契約の終了を契機として、両者の関係の解消に至ることもある。その場合、代理母は、自らの労力と困難にたいして不当に安い対価によって搾取されたものと感じ、依頼者夫婦の裏切りを感じる。代理母にとっての困難の主な源泉は、子への愛着と引き渡しによるものよりも、こうした出産と代理出産契約完了にともなう依頼者との関係の変質である、とテマンは指摘する。しかし、依頼夫婦側は、代理出産を金銭的報酬によって交換しうる商品としてのサービス以上のものとしてとらえ代理母に感謝の贈り物をする依頼者夫婦も多い。また依頼者に誕生祝いの贈り物をする代理母もいる。多くの場合は、なんらかの仕方で代理母と依頼夫婦のあいだにはコミュニケーションが持続し、ときに長期にわたって、関係が継続し、擬似親族的な結びつきに発展することもある（第７章）。

テマンによれば、多くの代理母は、はじめは経済的動機に促され代理母となる決断を下す。しかし、代理出産の過程で、自らの行為を子のない夫婦に子を持つことで歓びを与え、またそれをとおして社会に貢献する行為とみなすようになっていく。それは、シングルマザーとして社会的周縁な地位にある女性にとって、自尊心を高めるユニークな手段となる。実際、多くの経験者は代理出産を肯定的に位置づける（第四部）。

結論では、民族誌的観察の政策的含意が論じられる。テマンによれば、従来の商業的代理出産にたいする議論は、懐胎・出産によって培われる母子の絆という神話にとらわれてきた。しかし、彼女の観察や他の調査は、多くの代理母は、自己の感情や身体を適切に制御することができるということを示唆している。したがって、テマンは、出生児を代理母の実子とする法制度―たとえばイギリスにおけるような―は現実に即していないと批判す

Published by Yuri Hibino

る。テマンは「商業的」代理出産の制度化にさいして、代理母と依頼者との協同関係を促進するような措置を講じることを提言する。

初めにのべたように、テマンの著作は、民族誌として非常に内容の濃いものである。本書の叙述からは、フィールドワークの密度の濃さが十分伺い知ることができる。しかし、以下のような理由から本書にたいしてやや不満を感じる読者もいるだろう。まず、代理出産の人生史的および社会・経済的背景の叙述に物足りなさが感じられる。イスラエルにおけるシングルマザーをとりまく社会的状況や代理母たちの職業的経歴などについての叙述は十分掘り下げられていない。また、民族誌的叙述が、代理母と子をもとうとする女性の二者関係が閉鎖的世界として提示されているという印象がある。なぜならば、代理母と依頼者夫婦を取り巻く人々の声は本書ではあまり聴こえてこないからである。

さらに、彼女が主張する政策論的議論にも問題点が指摘できる。たしかに、彼女の民族誌的叙述は、妊娠によって培われる母子の自然な絆について社会的に流布した神話を相対化することで政策的な論議に一石を投じるには十分だろう。しかし、イスラエルにおける代理出産制度をどれだけ一般化できるのか、イスラエルの代理母の声から一般的政策的含意を引き出すことがどれだけ正当化できるのか。この点については十分な議論が欠けているように思われる。

以上の点にもかかわらず、テマンが提示する代理母や依頼女性の語りの湛然な分析の価値は損なわれることはないだろう。テマンは、一方で経済的困窮からやむをえず身体の一部を売り渡す「搾取の犠牲者」としての代理母、他方で商品としての生殖労働を取り引きする「自己所有的主体」しての代理母という生命倫理学的論議のなかでしばしば引き合いに出されるステレオタイプを相対化することに成功している。彼女の著作で浮かび上がるのは、さまざまな社会的、文化的制約下で選択しながら、自らの身体的行為や経験の意味を折衝する代理母のエージェンシーである。したがって、彼女の著作は、人類学の生殖医療研究において必読文献の一つとなるだけではなく、今後、ますます活溌化すると思われる代理出産をめぐる法的、倫理的論議においても、重要な文献のひとつとなるだろう。

(文責　島薗 洋介)

Published by Yuri Hibino